

令和 5 年 4 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00053

研究課題名(和文) 両戴記における礼経の完備化についての基礎的研究

研究課題名(英文) Research on the process of perfection of rites in the Book of Rites compiled by Daide and Daisheng

研究代表者

末永 高康 (Suenaga, Takayasu)

広島大学・人間社会科学研究科(文)・教授

研究者番号：30305106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：経書に残された喪礼に関する記載について、『儀礼』喪服「経」「記」「伝」の間には、喪服の体系や、礼思想の違いが見られることを明らかにし、そこに礼経を完備化されていく過程を読み取るとともに、この過程との関係において『礼記』諸篇の喪礼に関する各記載を思想的に位置づけることができた。特に、喪のステージが進むにしたがって喪服を改めていく変除礼の完備化の過程や、士喪礼を基盤にして大夫以上の喪礼が整備されていく過程について、思想的に明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

伝統的な経学の枠組みにおいては、経書中の礼に関する各種の記載の背後に統一的な礼の体系が存在するとされ、この仮定のもとにその解釈が積み上げられてきた。本研究は、これらの記載が歴史的に形成されてきた過程を明らかにすることにより、伝統的な経学を創造的に解体し、これらの記載に対してより合理的な解釈を与えるとともに、その背後にある礼学および礼思想の展開を思想的に語る道筋を付けることに成功した。ここに本研究の学術的意義がある。また、経書を伝統的な経学の枠組みから解放して社会に還元した点に、本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research clarified that there are differences in the system of mourning dress and the thought of rites among Sutra(Jing), Annotation(Ji), Commentary(Zhuan) of the chapter on the Mourning attire(Sangfu) in the Book of Etiquette and Ceremonial(Yili). In these differences, there is a process of perfecting the descriptions of rites, and in relation to this process, I positioned each description of funeral ceremonies in various chapters of the Book of Rites(Liji) in terms of the history of thought. This research in particular focus on the process of perfecting the Bianchul1, in which mourning clothes are changed as the stage of mourning progresses, and the process of developing the mourning ceremony for great officer, high ministers and feudal princes based on the Mourning rites for the common officer(Shisangli).

研究分野：中国古代思想史

キーワード：礼記 大戴礼記 喪礼

1. 研究開始当初の背景

前世紀末から中国本土では、先秦・秦・漢期のテキストが陸続と出土してきており、これら新資料の出現は、当該期の思想史の再検討を迫っているが、新出土資料の内容上の偏りもあり、その作業があまり進んでいない領域もある。その一つが礼経の「記」(注釈)としての両戴記(『礼記』と『大戴礼記』)の諸篇である。

今本の両戴記のうち、諸子の書に由来する部分は、『子思子』から取られたとされる緇衣篇の全体、および『曾子』から取られたとされる曾子立孝篇、曾子事父母篇の一部のテキストが出土してきたことから、その研究は大いに進展してきているが、『礼記』の中核をなす、礼経の「記」の部分については、まとまったテキストの出土例がないこともあり、旧来の注釈学的研究を超えた本格的な思想史的研究についてはまだほとんど手付かずの状態にあった。

そこで申請者は2014年頃より礼学形成史の資料として『礼記』諸篇を利用する道筋を付ける基礎的な研究を行い、その過程で、初期の礼学形成史を礼経の完備化としてとらえる視点を得た。

この完備化の初期の過程は、『儀礼』の諸「経」「記」の礼の記述の分析から導かれるが、

礼経の守備範囲を拡大していく方向

礼経の記述を整備していく方向

の二方向に大別され、後者はさらに

- a 礼の細部の記述を補う方向

- b 礼の分岐の記述を補う方向

に二分される。この後者はさらに、

- b - 不測の事態への対応による礼の分岐を補う方向

- b - 身分等の変数による礼の分岐の記述を補う方向

に区分されるが、『儀礼』の諸「経」「記」が成立した後は、後世に両戴記に収められることになる諸篇がこれらの完備化の過程を受け継ぐことになる。

これらの完備化の過程の内、および - b - については、本申請研究以前に、申請者はその概要をとらえることにほぼ成功していたが、- a および - b - の完備化について明らかにする作業が残されていた。

2. 研究の目的

上述の、- a および - b - についての完備化がいかなるものであったのかを問いかけ、この問いに答えることで、初期礼学の展開を思想史的に描き出していくことが、本申請研究の目的である。

これはまた『儀礼』諸「経」「記」が形成されていく思想的運動の延長上に両戴記の礼経の「記」としての諸篇を位置付ける作業であり、その作業を通じて、これらの諸篇が形成された時期の礼学の展開を明らかにするものである。この時期の礼学の展開は従来の研究の空白部であったから、この空白部を埋めることにより、中国古代思想史研究をより完備されたものにもまた、本申請研究の目的となっている。

3. 研究の方法

上述の - a および - b - の完備化に関する記述は、両戴記の各篇に散在しているが、特に喪礼に関して、前者は『礼記』の喪服小記篇に、後者は喪大記篇に、そして両者を混在させる形で雑記篇に比較的まとまった形で残されている。よって、本研究においては、これらの三篇を中心として両戴記の関連する記事を分析することが中心的な作業となる。

これらの三篇の内、喪大記篇は一篇として比較的よくまとまっているものの、他の二篇については、これを一時に一人の手になったものと見ることはできず、篇を単位とした議論をすることは妥当とは言い難い。そこで、『儀礼』の「経」「記」(喪服については「伝」も含む)との関係を見すえつつ、それぞれの篇を構成する個別の礼規定について、礼経の完備化の観点から検討を加えていくこととした。

具体的に行ったのは、(1) 喪服「経」を完備化していく過程の検討、(2) 変除礼を完備化していく過程の検討、およびそれと関連して(3) 親族喪が重複した場合についての規定の完備化の検討、それから(4) 喪大記篇と中心とした大夫以上の喪礼の完備化の検討である。

4. 研究成果

上記の内、(1) については「『儀礼』喪服篇をめぐる一考察」(『東洋古典学研究』第51集、2021年5月)にその成果をまとめた。

本稿においては、『礼記』諸篇に散見する喪服制(誰が誰に対してどのレベルの喪に服するの

かについての制度)を分析する前提として、まず『儀礼』喪服篇の分析を行い、喪服「経」から「記」、「伝」さらには『礼記』の喪服小記篇と服問篇を中心とした諸篇へと、いかなる形で喪服制が完備化されていったかについて考察した。

ここでの主要な成果は以下の点を明らかにしたことにある。喪服「記」については、末尾の喪服の寸法等に関する記載を除いて「経」の延長であるとする見解があったが、「経」が喪服対象列挙に始終するのに対し、「記」は喪服制の原理を一般的に規定する記述を含み、これが「経」とは異なる者の手になること。特に「公子」の母・妻に対する喪において、「記」がすでに「経」とは調和しない規定を定めており、「経」が内包する喪服制の「原則」から乖離していく傾向は「伝」や『礼記』諸篇においてはより著しいこと。「伝」はほとんど「親親」を語らず、「尊尊」を重視する形で喪服「経」を解釈しており、必ずしも「経」の忠実な解釈であるとは言えず、「経」が想定していなかったであろう新たな「原則」を多く喪服制のうちに導入していること。『礼記』の特に喪服小記篇を中心とした諸篇に見える喪服制の多くは、喪服「伝」の後の展開を示すものであること。『礼記』檀弓篇や喪服「経」が継父の存在に寛大であって、両者の成立の古さを示しているのに対し、「伝」は再嫁を認めない『礼記』郊特性篇や郭店楚簡『六徳』の思想的立場に近づいており、「伝」を受け継ぐ『礼記』諸篇の喪服制に対する記述もまた多くこの思想的立場に立つこと。

(2)については、「喪服の変除についての一考察」(『東洋古典学研究』第53集、2022年5月)にその成果をまとめた。

喪礼においては、喪のステージが進むにしたがって喪服を改めていく。これを「変除」という。だが、『儀礼』の士喪礼、既夕礼、士虞礼の「経」「記」に変除に関する記載は少ない。変除については、『儀礼』喪服篇の「伝」「記」や、『礼記』の諸篇によって、その礼が完備化されていくことになる。本稿では、この完備化の過程を追いつつながら、初期礼学の展開の一側面を明らかにした。

主たる成果としては、まず『儀礼』士喪礼等の想定する変除礼と、喪服篇の喪服制が必ずしも一致しないことを明らかにした。士喪礼等が喪主たる嫡子と、それ以外の庶子の服制を区別しようとするのに対し、喪服篇は嫡子と庶子に区別を設けておらず、この段階で変除礼の展開にひとつのねじれが生じており、このねじれが例えば「衆主人」に対する鄭玄注のプレを生じさせ、後の変除礼の議論を複雑化させている。

同様のねじれが喪服「伝」が喪服の升数について「経」の規定とは調和的でない新たな原則を持ち込んでいることから生じており、このねじれを解きほぐすことにより、『礼記』間伝篇に至る升数についての議論の展開を明らかにした。

また『礼記』諸篇に見える変除礼の記載については、檀弓篇に比較的古い段階の変除礼についての伝承が保存されていることを明らかにして、それら伝承が後の変除礼の構成に与えた影響を論ずるとともに、喪服小記、雑記等に見える記載の段階を経て、間伝篇の記載の段階に至る変除礼の完備化の過程を示した。

(3)については、「親族の喪が重複した場合について」(『広島大学文学部論集』第82集、2022年12月)にその成果をまとめた。

変除礼の議論と、喪が重複した場合の規定についての議論は不可分であり、(2)に引き続いて親族の喪が重複した場合についての規定の完備化について分析したのが本稿である。

本稿では、雑記篇・喪服小記篇に散見する喪の重複に関する記述は、いまだその背後に体系化された規定を有していないこと、喪の重複に関するより一般的な原則が示されるのは曾子問篇に至ってであること、また喪の重複に関する規定が整備されるのは服問篇・間伝篇に至ってであるが、両篇の基づく原則は互いに一致しておらず、『礼記』諸篇の成立の段階では、両者の統一は図られていないこと等を明らかにした。

(4)については、「喪大記攷」(『東洋古典学研究』第55集、2023年5月：印刷中)にその成果をまとめた。

本稿では、喪大記篇の作者たちが、士喪礼を基盤として大夫以上の喪礼を構成していく過程を再生するとともに、大夫以上の喪礼を含む喪礼全体の体系との関係から、彼らが士喪礼を一部見直していること、また、『儀礼』の少牢饋食礼が士礼の特性饋食礼を利用しつつも、士礼とは性格を異にする大夫の祭礼を構成しているのとは異なり、喪大記篇は士礼と相似形に大夫以上の喪礼を構成しており、大夫以上の喪礼を構成する試みとしては、雑記篇等に散見するそれに比して、初期の段階に属すること、また、『儀礼』の経に類した大夫以上の喪礼の記録としては、雑記篇に諸侯の甲問礼が残されているが、喪大記篇等の記述から、これが例外的な試みに属し、『儀礼』の士喪礼(既夕礼を含む)と同様の形で大夫以上の喪礼を記述する試みはなされなかったであろうことを示した。

以上により、上記の - a および - b - についての完備化の諸相が明らかにされ、本申請研究の当初の目的がほぼ達成されたことになる。

また、本申請研究の期間中、『礼記正義』の雑記上篇の冒頭から如筮節までの訳注作業を行い、学術誌上に掲載した。これもまた本申請研究の重要な成果のひとつである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 末永高康	4. 巻 55
2. 論文標題 喪大記攷	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 82
2. 論文標題 親族の喪が重複した場合について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島大学文学部論集	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 54
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿（十五） 雑記上第二十（三）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 61-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 52
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿（十四） 雑記上第二十（二）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 51 - 72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 53
2. 論文標題 喪服の変除についての一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 31-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 50
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿(十三) 雑記上第二十(一)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 127 - 156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 51
2. 論文標題 『儀礼』喪服篇をめぐる一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 19-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------